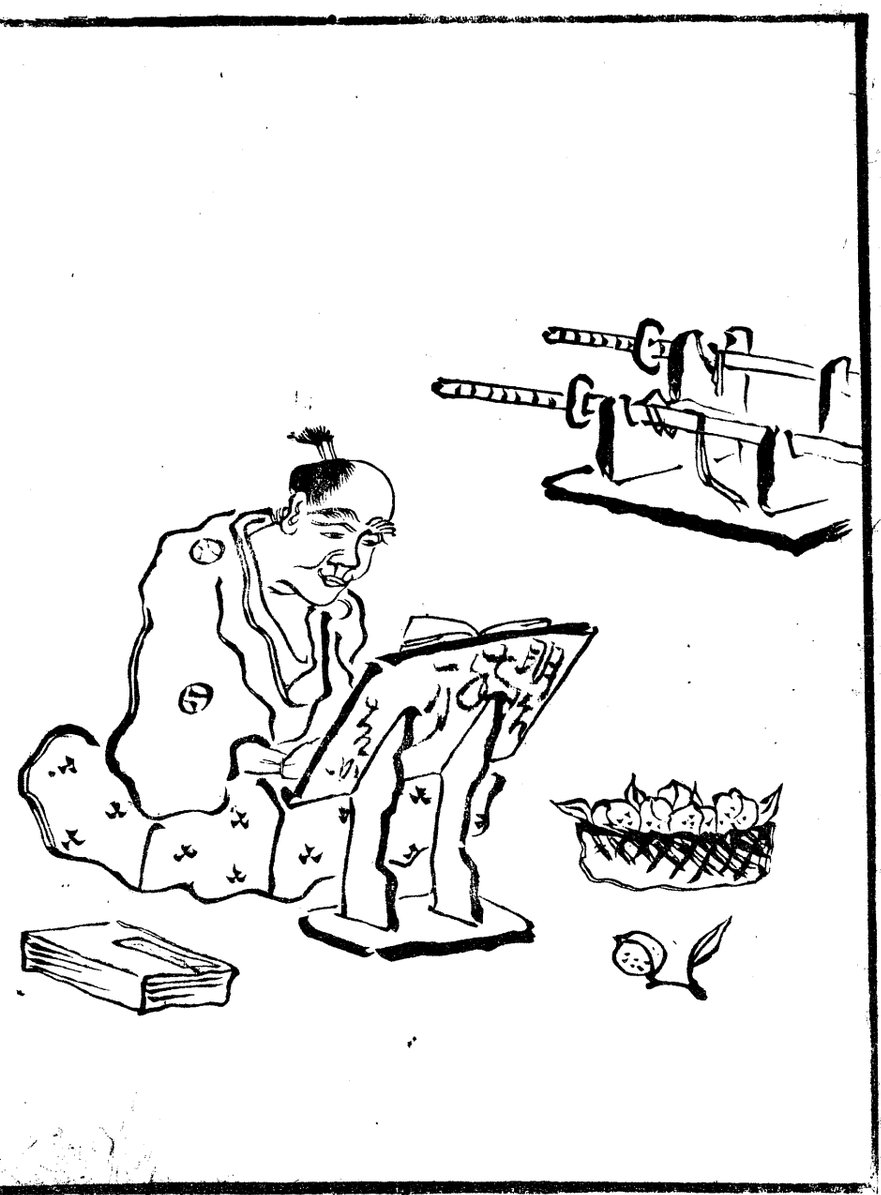
成山ゝ丹後の國の産あり三十歳のゝち江戸ゝ来り麻布二本榎ゝ住〳〵五十歳より東海道神奈川生麥といへる處ゝ隠居ゝ這人常ゝ桃とこのむゝりて幼名を桃太郎と呼ゝり衣服もこゝ多桃色とりつゝゝ其妻ゝまを止まども聽ゝ上下〳〵色の衣服ゝ〳〵往來ゝ人ゝ只管ゝまを笑ふ家の四面紅白の桃の樹數種を植ゝ春苔のゝ前栽のあり最よし〳〵亦夏秋の間ゝ実を食ゝ一日ゝ百とりつゝ計ゝ其接を藥店ゝひさゝ藥店那須屋何〳〵年々桃仁を加ふ支一石ゝおよぶと云ゝ別号桃苔菴蔡々居貫堂仙源あどこる桃の古事とりて号ゝ器も桃ありゝ桃ゝりて用るもの





多し　飯櫃火桶など桃のうちあり壁へ色ふゝせ三千
年の桃の画とゝして腰ぐるし　床室ゝ王母の軸とゝけ掩障
ゝ三傑桃園ゝ義とむとぶの圖とかゝむゝ桃品と号て
一部の書と撰ゝ桃の種類ゝとあげて古人の桃の
詩歌蔓々ゝ和漢桃の古文と殘ゝ集さ
ゝ肩董肆ゝて桃形の甲と買ゝ火災あゝ有ゝ時ハ是
と冠て看迴ゝ一日友人ゝ誘引ゝ戲場ゝ
ゝ芝居狂言ゝ文ゝ見る狂言忠臣ぐらなり
澤村宗十郎　桃井若狭介の役ゝ見ると見ゝ眞肩ゝ
ゝ當宵訥子と茶房の樓上ゝ酒ゝ黄苔杯



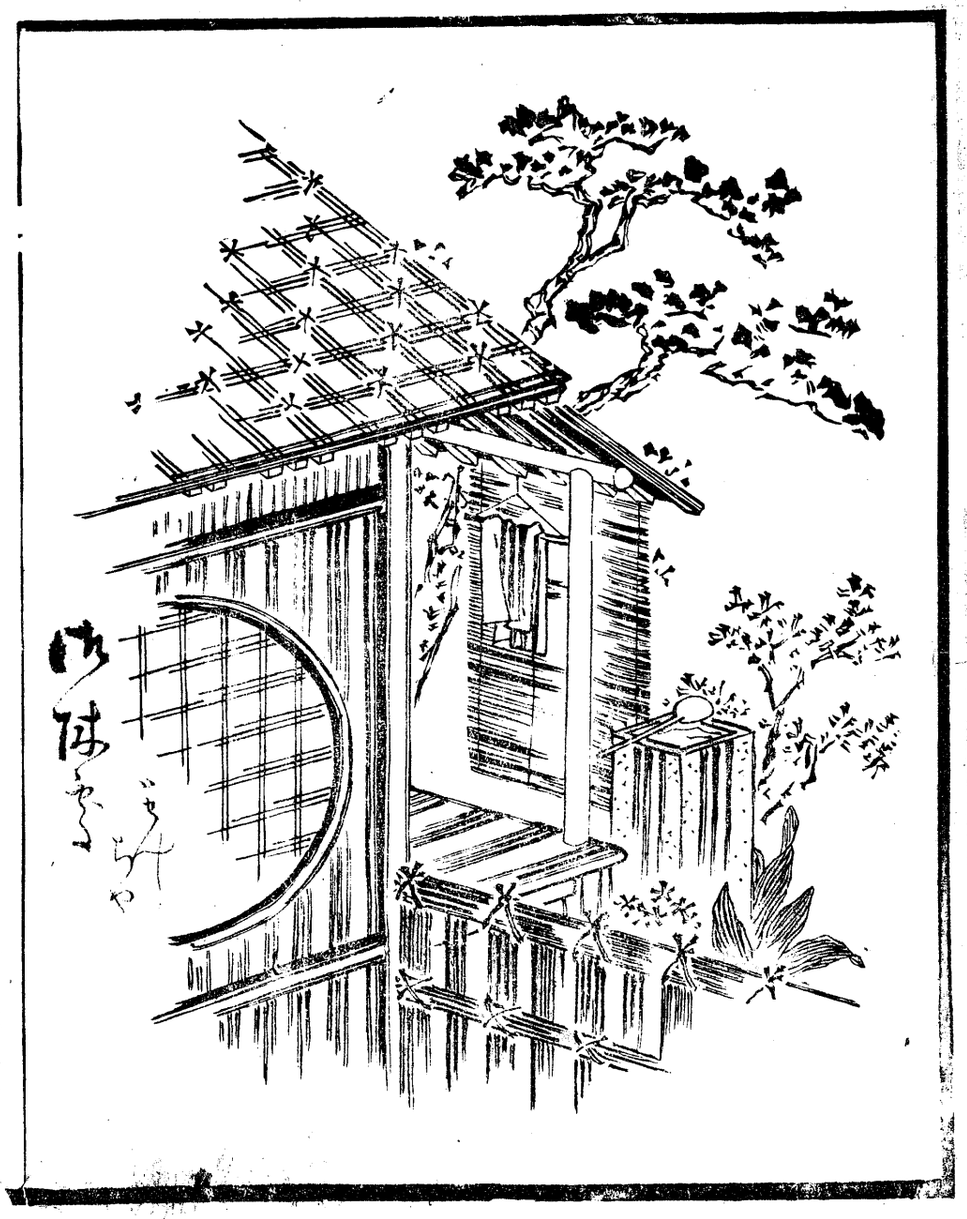
おゝ逢ゝ一年伏見の桃山の桃看んとて春の
半ゝ旅立ゝ芳野の苔見ゝ行人ゝおゝあゝ伏見
の桃見んとて百餘里の遠ゝ旅ぐゝ人ゝ亦有べゝと
て人々大いゝ笑ひしゝ

○島の勘十郎

元禄の頃京都室町通三条の南ゝ櫻木勘十郎と云ゝ者在
ゝ古器古書画の鑒定とゝくゝ這人つゝ編ゝ編の
と好ゝ衣服ゝ帯足袋ゝいゝとゝで色々の縞と著ゝ扇
のゝ副刀の鍔ゝ柄糸印籠雪踏の緒ゝでもゝ縞
ゝびといゝ支ゝ且暮の食事ゝも贅ゝさゝ計

を千蘿蔔かゝれるものを新漬と古漬と行義よくさゝゝ双べ煮物に大根牛房胡蘿蔔などりそ〳〵切てあゝゝ縞のゞ器ゝりゝ魚の類も鰆〳〵鯛をもち鯉をゞ〳〵筋あるものを用ひ椀折敷〳〵〳〵ひも皆縞ゝめ〳〵せ婢女奴僕ゝいうるまで殘ゞ縞の衣服を着せゝり然ども扨て異を好むゝいゝゞ天性かゝあゝしゝゞ家居も世ゝゞゝ樓上の格子そゝゞゝの縞ゝゝ建店頭もいゝゝ乃唐木ゝゝゝゝゝ組建〳〵縞の格子ひさゝの重木ハ些竹と寒竹ゝゝ三本づゝみ色を替らせ中庭の泉水ゝ當下ゝやゝゝ島といゝる金魚を放ち這ゝゝゝゝ樓上やそ





挿木とかけしの挿木二木づゝ縞になしたり左右唐樹にいたり
の欄干擬宝珠にいたるまで残らず縞のうちにて造りし中庭
の北にありて隣家の壁まで這方より縞にぬらせ店頭の長暖
簾といふもさらなり畳の縁まで皆縞なりし然ば島の勘
十郎とて當項名高かりし人なりしとぞ平安鹿角比豆流と
いへる人東都馬琴翁へ書ておくられしを爰にしるす

○煙草屋吉兵衛

泉州堺九軒の町東横町小河内屋吉兵衛といへる煙草商人
ありけり性赤きものを好み衣服帯襦袢手拭まで皆紅
染をもつてし老者の歯莽さへありとて妻子是をとゞむれ



ども聴ず外に火災ありとしれば火の赫きを看て五里
三里遠けれども行まで走り行しとぞ文政元年六十八
歳にして死去せり

○帯吉兵衛

大阪願教寺前三右衛門町といへる處に保長役をつとめ
在し飾屋吉兵衛といふもの帯をおほく貯蓄もちて
一日のあひだに七度八たびずゝ結びかへて歩行けり
衣服は一向数ならざれど帯のみおほく所持して百餘すぢ
に及しとぞ然ば世人帯吉とのみ呼ならはしけるにぞ後には
帯屋吉兵衛と心得たる人もありしとなり

○大島屋彦兵衛

備中の國窪屋郡倉敷といふる處ふ大島屋彦兵衛といふる豪家あり安永明和のころより彦兵衛殊のある屏風とあめて若干貯蓄もてる先祖より傳へもちし屏風最多し其上這彦兵衛追々屏風と買入るふで數十戸の帑藏の裡残らず屏風といふ外の家伙を一固も求ぶ數々の屏風のみ買ふて飯とる之ぞ竟に屏風二百餘双ふ外びる然るに和漢いろいろ名画墨跡をいつもさしあり奈何多尊さ御方の書画ふりも這家の屏風ふ夏の日



虫干のとき人來りて御屏風拝見いふ度と史ぬまぶ彦兵衛自親ふ客といぶあひ客次の裡と唱引あり紀一双々ふ講釈とて見ぶる支開帳場のいひたての如く屏風ぶふ讃もぶ殊の外ふ多かぶ支同國窪屋郡生坂村といふる處ふ五三兵衛といふる者あり家數五十三棟程もく沿豪家あり一時五三兵衛止支あき大客と得る支ありて家のうぶく番匠とやとひて造次あぶ既ふ其前日ふありて帑藏ふり金屏風ととり出し正堂の裡と飾ふて立ふ金屏風二十双ありて猶五六双あぶ客次のうぶ金ふて語るべきとあるべひふ常の繪屏風と

交んも最らちとしくしくび大島屋彦兵衛くくへ史はちつ〜金屏風五六双借來さざ〜れ残らび金ふ〜餞着ひべ〜ふしぢて一人の小僮ふいひはけ倉敷の大島屋へはちつ〜金屏風五六双かく〜給るふと叮寧ふいひちくるが大島屋彦兵衛這亘とちく〜答て云ふ太最やひき幹ふいあれども小老家ふ金屏風一双も處持ひくびく万望い外ふ〜ぢん借ひ〜給くび〜ぢ断りて返しくる五三兵衛是と聞て大いふ怒りかりて倉敷の彦兵衛屏風癖ありと諸國までも隠あく屏風庫數十戸とりてる者が金屏風の五双や八双あれといふ支やいあくん察ひるふ我家くくび俳僥の事ありて大客と得る

夫とねらひて我に幹を闕さんとの為なるべし好々いまハ渠
をば曳べからば許多の黄白をもたせて八方を探させ當日
中に金屏風五六双買とりて來るべしと數圍けるく賴なる
を這家の支配人主人をいさめて云るハ是まで不憤懣なる
べからば是を正しく使のものハ稟やう不良支とおぼえ侍る
這ら人をば小僕まゐりて借來りさふらはんと云るまで主
人も是に志らぬひなる斷て支配人ハそれ大島屋へいそき當
般らば主人止事なき大客を得候ふよりて願しくハ金屏風
五六双恩借に預りたく侍ふと演ければ彦兵衛答て我家
屏風ハ二百双あるも餝りさふらへども金屏風ハ一双もなし但し



小さき金屏風なくしこれはあり五六双も御要ならば外にておもかり
給ふべしといへば當下かの支配人何心なく奥のかたを覗れ看に
正堂に金屏風二三双立まはして有けるにぞ支配人大いにいかり
金屏風一双もなしと曰ひながら當今奥正堂に見えけるは金屏
風にあらずやいかに吝惜しきへだてさるなくに盡頭ば曰ふ
べからば借て借ばなからぬまでの事ありと座を立んと做る
を彦兵衛急に見とどめて云やう今奥にある處の屏風をば
金屏風におもへバ彼も金箔なり附の屏風なり金屏風といひ
てハ金になく揺る屏風の事なり其金屏風をば小老一片紙
なくり當下足下に看せ候ハんとやがて小僮們に命じて

帑藏の裡よりひとつの筐と把出させ自親立て這筐をひらき見
一片の屏風とりいだし彼支配人に看せたる高さ僅
ふ三尺ばかり厚さ一寸程ある眞金の六枚屏風なりけり五三
兵衛が支配人こそと看て一言の詞もなかりしとぞ彦兵衛
きゝ曰く彼金箱屏風おいらが要なくば百双なりとも御用ぐ
ち候へべしゆゑ夫より奴僕輩に分付て帑藏よりとり出
させ二十雙あまり五三兵衛が方へ運せたるとぞ

百家琦行傳壹之卷 終

# 百家琦行傳

二

281
2

本久

# 百家琦行傳貳之巻目録


㊀三井親和
○狂歌師裏住
○董堂敬義
○三組町與三右衛門
○谷風梶之助
○御師匠良助
○辰巳屋の老爺



東京帝國大學圖書之印

東京帝國大學
登記番号 543645
昭28.3.31 和
寄贈